第 15 回日本がん・生殖医療学会学術集会
2025.2.22-2025.2.23
PS-41 大阪中央公会堂

当院で開催する『がん・生殖医療カンファレンス』の役割

柴崎有美 1)、下西祥子 1)、渋谷和代２）　藤島由美子３）
藤岡聡子 1)、辻勲１)、福田愛作 1)、森本義晴４）
１）IVF 大阪クリニック 2）八尾市立病院 3）越田クリニック
1）IVF 大阪クリニック　4）HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】がん告知後の精神的に不安定な患者に将来の妊孕性を説明することは医療者にとって容易ではない。しかし、がん治療後の QOL を考えると患者の意思に基づいた選択が可能な支援が不可欠である。当院では、がん治療病院および生殖医療施設の従事者が妊孕性温存に関する相互の知識を顔の見える関係で情報交換し、患者の意思決定支援を行えるよう、がん・生殖医療に関するカンファレンスを開催してきた。今回の研究では、そのカンファレンスが果たす役割について検討した。
【実践内容】当院にて 2 つのカンファレンスを開催した。「関西がん治療と妊孕性温存の勉強会」は、がん生殖医療に興味のある主に看護師を対象とした会で 2016 年から 14 回開催し、疾患や意思決定支援に関する講義を実施してきた。「大阪東部地域のがん・生殖医療連携会議」ではがん治療に携わる医師およびコメディカルを対象として 2019 年より 4 回開催し、医療者のみならず当院で妊孕性温存治療を受けた患者からも治療を受けた時の心境や医療者へ望むことなどの講演を依頼した。カンファレンス終了時にアンケートを実施した。
【結果】「関西がん治療と妊孕性温存の勉強会」の参加者は延べ 614 名であった。アンケートでは「意思決定支援への理解が深まった」、「臨床で患者への情報提供ができた」などの回答を得た。「大阪東部地域のがん・生殖医療連携会議」の参加者は延べ 190 名であった。アンケートでは「未熟卵体外受精（IVM）を含め妊孕性温存の実際を知れた」、「体験者の声を聞けて励みになった」、「院内のサポート体制を構築する必要性を感じた」などの回答が得られ、妊孕性温存の知識の広がりと密接な連携の重要性が確認された。
【考察】クリニック独自開催カンファレンスはがん・生殖医療の理解を深め、診療連携の現状の見直しと再構築の機会となる。また患者の体験談を通して患者の気持ちが理解でき、今後の実診療に役立つと考えられる。